

魔法少女ならぬ魔法中年が 世界の平和を守る事にな ったようです

酒井仁
挿絵/にの子



立ち読み版

CHARACTERS

まちがるじんぶつしょうかい

MAGICAL GIRL MIRACLE SUGAR
ATOMIC POCKET NOVELS SERIES

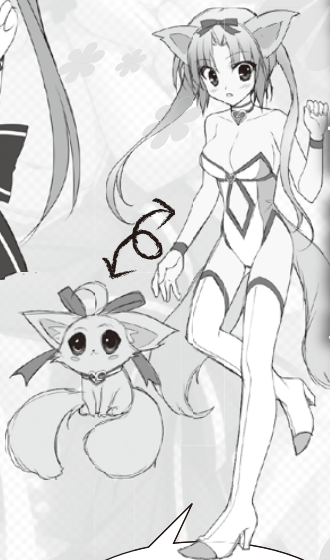


野暮な説明なんマシュガーには
ノイサンキユーよ♡

★魔法少女★

ミラクルシュガー

デタラメなほど強力な魔力で、異次元から現れる魔獣を倒す魔法少女。常にファンへのサービスを忘れないアイドル的存在。しかしその正体は……!?



もうっっ！誰でもいいわ！

アンジェリカ

異世界「バル・セレティア」から魔法少女を探しに人間界へやってきた。普段は小動物の姿だが、人間の美少女の姿にもなる。

★魔法少女★ マジカルパーティー

人間界に現れたもう一人の魔法少女。シュガーと違って真面目に魔獣退治に勤しむ。しかしシュガーの奔放さにも密かに憧れている。

こっちの台詞よ、
馬鹿ア、ミンチー！



この世を乱す魔獣は私が許さない！

マジヨラム

アンジェリカ同様、異世界「バル・セレティア」からやってきた。アンジェリカとはライバル関係。現在はパーティーのパートナーを務めている。

オシサンの
漢方胃腸薬、飲む？

★企業戦士★ 佐藤 鯨太郎

中小企業で働くしがない中年サラリーマンだったが、アンジェリカに魔法の資質を見出され……。

イチモツを擦りつけながら耳たぶを口に含み、こりこりと軽く歯を立てる愛撫にわななきながら、アンジェリカは魔法少女の背中に腕を回し、赤子のようにしがみついている。

「そろそろ……いいよね? アンジェの処女膜、破っちゃうけど、いいよね? 本当は小汚いオッサンのちんぼだけど、いいよね?」

いいわけがない。

相手は魔法少女の姿とはいえ、今日会ったばかりの中年のオッサン。

しかもこんな衆人環視の中で処女を散らされるだなんて、とうてい受け入れられないに決まってる。

なのに、獣耳少女の下肢は切なげに広げられ、涙をいっばいに溜めた眼差しでこくこくと頷いてしまっていた。

「いくよ………んんっ、き、きついいっつ」

「んぎひいいんっ!?!」

めりっ、みしみし……シユガーとアンジェでは、アンジェの方が背が高く、成熟して見える。

その上、じっくりねちねちと時間をかけた愛撫で、処女穴は溢れんばかりの蜜液で満たされている。

にもかかわらず、乙女の処女穴は軋みを上げ、無骨な侵入者を頑かたくなに拒む。

「ふひいいい、お、おつきい……よお……ッ」

「ま、まだ先っぽだけなのに……ヴァーシジョンロード、狭すぎだよ……ッ」

そう言いつつ、魔法少女の小さな手がアンジェの腰をしつかり押さえつけ、ぐいぐいと腰を突き出してくる。

みしっ……みりみり……みちっ。

「んくううっ！ ふ……ああ……んふううんっ」

可愛い外見からは想像もできない、巨大で固くそそり立ったイチモツ。

それは少しずつ、だが確実に乙女の処女穴を征服し、奥へ奥へと侵攻していく。

最初は頑なに拒絶していた処女聖地も猛烈な攻勢に晒され、ゆつくりとだが乙女肉を拡張されざるを得ない。

（あああつ、ほ、本当に入ってきてる！ 男の人の……魔法少女の、おちんちんが、私の中に打ち込まれてるううっ！）

痛みと衝撃は、半々くらい。

しかしそこに得も言われぬ熱が加わって、破瓜の痛みをじんわりと和らげていく。

ひとたび処女膜を貫通した魔法少女は、強引な突き入れから一転、小刻みに腰を揺すり始める。

純潔を失ったばかりの窮屈な肉穴を堪能するように、「ずっ、ずっ」と小さく動いては、

アンジェの首筋や乳房にキスの雨を降らせる。

「んっ、ちゅぱっ。れろ……アンジェのおっぱい、汗の匂い、すごくいいよお。それに、お、おま〇こがきゅうきゅう締めつけてきて……」

「い、言わないでえ、恥ずかし……んむううっ？」

股間を突かれながら唇を奪われ、ぬりゅんつと舌が差し込まれる。

れるれると甘い唾液を交換しながら唇を貪りあうと、首の後ろがぞわぞわする。だがそれは中年男性に犯されているという嫌悪感ではない。

可愛い魔法少女のイチモツに処女を捧げたことに興奮しているのだ。

(ち、ちがう、私はそんなじゃ……)

否定しようとしても、肉体の反応は抑えられない。

処女を失ったばかりのアンジェの秘肉は急速に、本人の意志とは無関係に、破瓜の痛みでなく女の悦びを感じるように開発されつつあった。

(私ッ、シュガーに犯されて、キスされて感じて……？ 初めてなのに……相手は……
……なのに……)

「アンジェ、アンジェリカ！ う、動くよ、もっと激しく動くよ……ッ」

「ふわあああつ、シュ、シュガーッッ！ ひい、ひあああ、お、お腹の中で……おちんちんが暴れてるよおおっ」

もう、自分たちが無数の視線に晒されていることなど、気にする余裕もない。

シユガーはアンジェの足首を掴んで持ち上げると、無防備になった下肢の付け根めがけ、すごい勢いで下腹部を打ちつけてきた。

ずぶつ、ずにゆにゆつ。ぱんつ、ぱんつ、ぶしゃあつ。

肉と肉がぶつかるたび、湿った音と共に体液の飛沫が上がる。

艶めかしい乙女の匂いが淫らに立ち上り、獣耳少女とふたなり娘を包み込む。

シユガーはアンジェの右脚を抱え込むようにして、ふくらはぎやくるぶしをぺろぺろねぶりつつ、ずつ、ずつとリズムカルに膣穴をえぐり、掘削する。

アンジェはもはや逃げ場もなく、巨根が打ち込まれ、引き抜かれ、それが絶え間なく続く刺激に悶えよがることしかできない。

「あひいい、ひいい、きゃひいいんつ。すご、すごいよおつ、こんな……おちんちん凄すぎるよおおお〜〜〜ツツツ」

「ちよつ、アンジェ、そんなに締めつけないで……あううう、奥の方がきゅんきゅん締まって、き、気持ちよすぎだよおお〜つ」

ぬぼつ、ずぶぶつ、じゅぼ、じゅぼつ。

ピストンの激しさが増すと、もはやリズムだのなんだのは関係ない。

ただ闇雲に腰を振り立て、肉棒を突き込み、カリ首でごりりと膣壁を擦り上げては、乙

女の蜜液を掻き出す。

アンジェの身体を折り曲げるように屈曲させると、身体全体でのしかかって正常位で犯し続ける。

犯されている乙女もそれに応えるように、下肢をシュガーの腰に絡め、舌を突き出し接吻をねだる。

「んちゅっ、ぷはっ、れろ、れちゅ……アンジェ、アンジェ、アンジェのおま○こいいよ
おとおおくくッッッ」

「はふ、れろ……シュガーのおちんちんッ、奥に、奥まで届いて、変になっちゃう、おま○こ変になっちゃううううう！」

長大な男根はアンジェの子宮を押し潰さんばかりの勢いで打ち込まれる。

子宮はおろか内臓にまで響く猛烈な突き入れに、処女をなくしたばかりの乙女はわななき、悦楽にうち震える。

（なにこれ……これがセックス……？ 初めてで、こんな気持ちよくなるなんて……あ、でもまだ、何か来ちゃう、きっちゃうううう！）

「ああああ、もうらめえ、もうイッチャうよ、アンジェリカ！」

ピンクのツイントールを振り乱し、魔法少女は半開きの唇から舌を突き出して悶えよがる。



神は悦楽に投げ出され、荒れ狂う嵐に舞う木の葉のように翻弄される。

(なにこれ……すごい……わけがわかんないけど、気持ちいい……)

腫いっぱいに詰め込まれた男根が、少しずつポリウムを失っていく。

そしてすぐ間近に少女の荒い息、甘い息。

遠くにギャラリーの興奮した声が聞こえるが、それが何を意味するのかすぐには理解できず、アンジェリカはただエクスタシーの余韻の中を漂う。

「ハア、ハア、ハア……す、すごい……あれがセックス……つて、シュガー!？」

力尽きたように自分の上に倒れ込んでいる魔法少女に、アンジェリカは息を呑んだ。

「ほえ〜？ 久しぶりのセックスだったから、力が抜けちゃったよ〜」

「ちがつ、ちよ、あんな姿がやばい！」

ピンクのツインテール、愛らしいコスチュームの魔法少女の姿が「ぶれ」始めている。

まるで電波受像状態が悪化したように、「ざざつ」と乱れては、その代わりに「ある姿」が現れかけている。

それはもちろん魔法少女ミラクルシュガーの本体——魔法中年、佐藤鱈太郎。

「おい……魔法少女の方、なんかおかしくね？」

そんな見物人の声に、アンジェリカは総毛立つ。

そうこうしているうちに、魔獣はどんどん巨大化し、人型の巨人に変貌する。

だがただの人間型ではなく、肩から左右に二本ずつ、太い腕が生えた四腕の怪物。

「きゃっつ、なんか力持ちさんっぽくて、あんなのに捕まったら私でも逃げられないかも
っつ」

大袈裟に怖がつてみせる魔法少女に、ギャラリーの声援が飛ぶ。

「頑張つて、シュガーちゃん！ そんなヤツに捕まらないで！」

「でも捕まっちゃつても諦めないで！」

「魔獣の方もそれなりに頑張れ、つうか空気読んで!!」

なぜか魔獣の方にも声援を送るギャラリーたちは、このところのシュガーの戦いを心待ちにしている「大きなお友だち」である。

というのも、ギャラリーの数は増える一方で、アンジェリカの記憶消去が追いつかなくなり、とうとうシュガーが魔獣にエッチな目に遭わされるシーンの隠蔽いんぺいを諦めたのだ。

「いや、先日のスライムモンスターもなかなかでしたなあ」

「私は先週の、巨大な獅子のような魔獣にシュガーちゃんが獣姦じかんされそうになるシーンが忘れられなくて」

「しかしあれはシュガーちゃんに牙をむいて、さっさとやられてしまいましたからね。今日の魔獣は人型だから、期待できそうですな」

「さあ〜っ、そろそろいつちやうよおお〜っつっ！」

ぐおおおん、と咆吼を上げ、ついに実体化する四腕の魔獣。

ゴリラのような巨体には毛はなく、暗褐色の肌が不気味で、真つ赤な瞳で魔法少女を睨みつける。

「ミラクル・カラフル・デリーシャス！ スイートパワーで悪い怪物はイチコロだよお〜っ」

くるくるとバトンを回し、決めポーズを取るシュガーは堂に入ったものだ。

七色の光がバトンから迸り、光のシャワーは凄まじい勢いで魔獣にぶつかり、その目を眩ませる。

「ぐうおおおおおおおおんんん！」

ぶんぶんと丸太のような巨腕を振り回して魔法の光を振り払う。邪気が実体化した魔獣は、魔法の光にも干渉できるようだ。

魔獣の体長は三メートル以上、振り上げた拳はスイカよりも大きい。最初にシュガーが倒した魔獣ほどの大きさではない。

だが魔獣の強さは単に大きさを決まるものではない。その分厚い胸板は、並の攻撃魔法など跳ね返してしまうだろう。

すごい勢いで繰り出したパンチをシュガーに叩きつけようとするが、魔法少女は軽やか

にそれをかわしてみせる。

この辺りは某怪獣退治の専門家が戦いを始めるときの、軽快なBGMが流れるべきシーンである。

「頑張れッ、シュガーちゃん！」

「いけっつ、そこだあっつ」

ギャラリータちも安心しきった顔で少女と怪物の戦いを見つめている。

だが上空では再び邪気が密度を高め、怪しげな空気が漂い始める。

テレビ番組でいえば、好調に戦っていた正義のヒロインに危機が迫ることを知らせる、おどろおどろしいBGMが流れ始める頃合いだ。

「ああっ！ あれを見ろ！」

「も、もう一匹現れただつてっっッッ！」

上空で渦巻いていた邪気は見る間にもう一匹の四腕魔獣となり、シュガーめがけてダイブしてきた。

かろうじてそれを避けるものの、アスファルトに大穴を穿つほどの衝撃が魔法少女の小さな身体を吹き飛ばす。

「きゃうんっ！」

無論、魔法の力で保護されているシュガーの肌には傷一つ付いていない。

だがいち早く少女の背後に回り込んだ最初の魔獣が、がっちり少女の細い腕を掴み上げる。

少女の手から虚しくバトンが落ちて地面に転がる。

「ああ……す、すごい力……ふりほどけ、ない……ッ」

すかさず魔獣のもう一組の腕が、シュガーの下肢を掴むと、少女は四肢を完全に押さえつけられた格好だ。

そのままぐいと持ち上げられると、あたかも磔刑たっけいになったかのような体勢。

懸命に身をよじって逃れようとすると、魔法少女のボディラインがくつきり浮かび上がり、ギャラリーはやや前屈みになりながら魔法少女を応援する。

「ああつ、シュガーちゃんが捕まった!」

「くそう、魔獣め。シュガーちゃんをどうする気だ!」

(……………ああ……今日もこの流れなんだ)

シュガーの戦いを見守っていた獣耳の少女は、ギャラリーから立ち上る邪な気を感じ取っている。

それは魔獣を生み出す邪気に似ているが、破壊衝動とは少し違う。

彼らはシュガーを応援すると同時に、ある期待感を持っている。

その感情が知らずオーラのごとく漏れ出し、魔獣に影響を与えているのだ。

「がるうううおおおおお〜んっつ！」

魔獣は牙をむき出して咆吼したかと思うと、高々と魔法少女を吊り上げる。

大人の腰ほどもある太ももに筋肉の筋が走ると、つるつと平らだった下肢の付け根に変化が生じる。

もこもこ……と肉がうねったかと思うと、巨大な肉棒が生えてきたのだ。

カリ首が凶悪そうにめくれ、肉幹部分には太い血管が浮かんでビクビク震えている、そのさまはどう見ても男性のシンボルそのものだ。

「あれは魔獣のちんぼなのか！ くそう、シュガーちゃんをどうする気だ！」

「シュガーちゃん、逃げろおおおおお」

魔法少女の大ピンチの前に、ギャラリーはますます前屈みになる。

魔力の流れは普通の人々には見えないが、アンジェにははつきりと見える。

人々の発する邪な感情がエナジーとなって、魔獣に注ぎ込まれている……つまり、魔獣が陰莖を生やしたのは、彼らの潜在的願望によるもの。

魔獣は文字通り「空気を讀んだ」結果として陰莖を屹立させ、魔法少女を陵辱しようとしているのだ。

「た、たとえどんな目に遭わされたって、私は負けない……ッ！」

しかし魔法のバトンを手放し、自由を奪われた魔法少女の運命は風前の灯火。

獣欲に目を血走らせた魔獣の陰茎はいよいよいきり立ち、先端からは透明な汁が滲み始める。

牙がずらりと生え揃った口からはよだれを垂れ流し、臭い息を魔法少女の耳に吹きかける。

「がふっ、がふ、がふふふっ」

長い舌を伸ばすと、魔獣はシュガーの耳の後ろから首筋を「れろ〜り」とねぶり上げる。その不気味な動きと感触に「ひうっ」とシュガーは身をこわばらせる。

魔獣は少女の汗と体臭をじっくり堪能するかのように、ざらざらした舌をなお少女の白い肌に這わせるのだ。

れるれる、ちゅっ、ちゅばっ。

むちゅむちゅと大きな音を立てて、獣の舌が少女の肌を辱める。

「ぶほぶほっ、ぐひひひひ」

するともう一匹の魔獣が、正面から近づいてくる。

こちらもただ攻撃衝動を向けるのではなく、だからだよだれを垂れ流しながら、歪めた唇を「ぶちゅうっ」と少女の頬に押しつける。

四本の腕は身動きの取れない魔法少女の肢体を這い回り、その柔らかかさや凹凸をねちねちと味わい続ける。

「あっ、いやあっ」

びりっ。襟元に魔獣の爪が引つかかり、大きく胸元が裂ける。

肌を傷こそ付かなかったものの、形のいい乳房がこぼれ出て、ピンク色のニップルが露わになってしまふ。

小ぶりのサ克蘭ボのような乳首に魔獣はいたく興味をそそられた様子で、長い舌先でちろちろと突起物をねぶり始める。

れるっ、れるっ、ねちよねちよ……じゅるるっ。

片方の乳首を吸いながら、残るニップルには獣の無骨な指が伸びる。

無骨とはいいつつ、太い指先は器用に突起物を挟み込み、「こり、こりっ」と絶妙な力加減で乙女の突起物に刺激を与えてくる。

これももちろん、ギャラリーたちの潜在願望が魔獣に余計な影響を与えているのだ。

「あんっ、おっぱいいいじめちゃいやあくんっ」

懸命にもがく魔法少女の目元が羞恥に染まる。

公衆の面前で辱められる恥辱、そして敏感な部分へのアプローチが少女の性感を活性化しているのだ。

「くそう、邪悪な魔獣め、オレたちのシユガーちゃんを醜い欲望で汚すなんて、許せねえっ」

「だ、だがオレたちはシュガーちゃんを見守ることしかできない……」

他ならぬシュガーの痴態を期待し、視姦しているのは彼ら見物人たちなのだが、彼らに明確な悪意があるわけではない。

ただ、「ピンチに陥った魔法少女」を応援しつつ、心の一部でその恥ずかしい姿に興奮しているだけなのだ。

そんな、言ってみれば茶番劇の一部始終を、異世界の住人アンジェリカは眺めることしかできない。

（だいたい、あの人の魔力ならあんな拘束、簡単に脱出して一発で魔獣を消し飛ばせるでしょうに……ッ!）

なのにそうしないのは、ひとえにシュガー自身がそれを望んでいるから。

魔獣触手に搦め捕られ、散々陵辱されて快楽に溺れてしまった体験から、ピンクの髪の毛魔法少女は学習してしまったのだ。

わざと魔獣に捕まって、大ピンチな状況に自分を追い込むことの楽しさ。

そして魔獣からエッチな辱めを受けるといふ、倒錯した快感。

しかもその痴態をギャラリーに見せて、彼らが興奮するさまを見てシュガーも興奮するという、肉欲と興奮の永久機関である。

「ああっ、スカートの中に手をつ突っ込んでんじやだめえ〜っ」

背後の魔獣はシュガーの四肢を押さえ込んだままだが、前にいるもう一匹の四本の腕はまったくのフリー状態。

ケダモノの欲望にまみれた腕はシュガーの初々しい乳房を揉み、太ももを撫で回し、スカートの中に遠慮なく潜り込んでくる。

そして下肢の付け根、乙女の大切な部分を包む布きれを、いともあっさりと剥ぎ取ってしまう。

「ぐほっ、うほおおうっ！」

みりみりみりいっ。

正面に立った魔獣の股間にも、巨大な陰茎がそそり立っていく。

その立派すぎるイチモツを握ってしごき立て、腰を前に突き出し、少女の花弁を貫こうとする。

「むぎいいいいいッッッ！」

だが、ここで背後の魔獣が威嚇の唸り声を上げる。

さもあらん、シュガーを捕らえて自由を奪っているのは後ろの獣。

しかし獣の腕は魔法少女の四肢を拘束しているため、シュガーの身体を自由に弄べないのだ。

執拗にうなじや耳に舌を這わせてはいるものの、背後からでは乳房を吸うことすらでき

ないのだ。

さながら人の言葉に変換するならば。

「てめえ、オレがこの娘っ子を押しさえつけてるのに、お前が先に突っ込もうたあどういう見だ」

と口をついてきたところだ。

「ぐほっ、ごふごふううっ……」

すると今にもシュガーの股間を刺し貫かんとしていた魔獣が、申し訳なさそうに腰を引いて低い唸り声を上げる。

「そいつはすまなかつた、兄弟。一番乗りは譲ってやるよ」

とでも言いたそうな魔獣に、背後の魔獣は嬉しそうに雄叫びを上げる。

「ぐおう、ごおおうううっ！」

その股間には、人のものをはるかに上回る太さと長さを誇る巨根が、みりりといきり立つて天を仰いでいる。

獣の情欲に支配された魔獣は、我が腕に捕らえた極上の獲物を貪るべく、「ぐぐっ」とシュガーの両脚を左右に大きく広げた。

「あぐうっ……！ い、いやあ……お、股さけちやうよおおっ」

「ぐぎゃほっ、ぐひ、ぐひひっ」

魔獣の狂暴ともいえる欲望をダイレクトに向けられ、さすがのシュガーも怯えた表情を見せる。

怪物の四本の腕はフォークリフトさながらに魔法少女の華奢な肉体を持ち上げ、開脚された股間部分を魔獣の長大な凶器の上にセットしようとする。

それは肉の槍に貫き通されようとする罪人の如し。

「あつ、あ、なんか当たってる？ いやあああ、ごりつて固いものが、アソコに当たってるよおつ？」

少女は腰を左右に振って、どうにか挿入を拒もうとするが、そのたびに花卉が亀頭を擦り、魔獣はかえって歓喜の声を漏らす。びくびくと長大な肉茎が跳ね上がると、湿った花びらに擦れて「くちゅ、くちゅ」と淫らな水音が響く。

「んふうっ、く、クリちゃん、こ、擦れて……ッッ」

だが背後からの攻撃ばかり気にしてられない。

前にいる魔獣は魔獣で、露わになった乳房を両手でむにむにと揉みほぐしつつ、シュガーの唇をべろべろねぶり回してくる。

四腕であることを最大限に活かし、乳房を両手に収めたままで、残る腕を尻や太もみに這い回らせて乙女の滑らかな肌触りを楽しんでいる。

恥辱に震える少女の怯えたさまさえも、汚らわしい魔獣に快感を呼び起こすのだ。



「ごおおおおおおおおッ。」

ピンクとブルーの魔法の力が無数の花びらとなって、二人を中心に渦を巻く。

それは触手群を枯れ枝のように吹き飛ばし、鋭い疾風となって魔獣たちに襲いかかるが、ギャラリーたちにはなんのダメージも与えない。

なのに魔獣の皮膚、筋肉だけが切り裂かれ、傷口から漆黒の邪気が噴きこぼれる。

「S（シユガー）&P（パーティー）、アルティメット・ディストラクション！」

魔力の渦動は勢いを増し、もはや魔法の人為的竜巻。

魔獣どもはシユガーたちを攻撃するどころか、渦動に巻き込まれないよう踏ん張るので精いっぱいだ。

「グオ、オ……オオアアアアアアアア！」

圧倒的なパワーを前に、魔獣の顔に初めて恐怖の色が浮かぶ。

超絶的な魔法を自在に操るピンクの髪の少女は、渦の中心で微笑んでいる。

いや——穏やかそうに見える満面の笑みの裏に、絶対零度の怒りが透けて見える。愛らしいつぼみのような唇が、「ある言葉」を無言で紡ぐ。

「逝・っ・て・よ・し」

それは、シュガーⅡ佐藤が初めて覚えたネットスラング。

「えっ、いまどき……………?」

パティーのつぶやきを呑み込むように、ピンクとブルー、二色の魔力嵐はただの一瞬で魔獣を全滅させたのだった。

「うっ…………」

「パティーちゃん! だ、大丈夫?」

魔獣の殲滅を確認したパティーの膝ががくりと折れ、シュガーが慌てて抱き起こす。

触手や魔物ペニスで散々罵られたパティーだが、シュガーの魔力を分け与えたことで、ある程度は回復しているはず。

が、シュガーはすぐにその原因に気付く。

(すごい、女の子の匂いが立ち上ってくる。パティーちゃん、まだ身体が疼いてしょうがないんだね)

「シュ、シュガー……………どうして、来たの。あなたには、大事なお仕事が」

魔物に処女を奪われそうになったというのに、青い髪の魔法少女は、目を潤ませながらシュガーに抗議する。

シュガーはそんな少女に微笑みかけると、迷うことなく唇を被せる。

「うおおおおろ〜っ！ こ、これはなんとというご褒美展開ッ」

盛り上がるギャラリーをよそに、美少女たちはまつすぐに見つめあう。

「お仕事は確かに大事だよ。でも、お友だちのピンチを見捨ててでもしなきゃいけないお仕事なんか、ないんだよ」

「シユガー……でもあなた、家族と一緒に暮らせるかもしれないのに」

パティーの言葉に、シユガーは少女らしからぬ哀愁の表情を見せる。

「それも知ってるんだ……。でも、たとえ一緒に暮らせなくても、家族は家族だから。それに今は、魔法少女も私にとって大事なお仕事なの。私みたいな……。……。でも、この世界を守る、そんなきらきら輝けるステージなんだもの！」

そう言ってシユガーは、優しくパティーを抱き寄せる。

「私がパティーちゃんに魔獣退治を任せていたように、パティーちゃんも今は私に甘えてね、どうして欲しいの、正直に言って」

その言葉に青髪の少女はポツと顔を赤らめて目を逸らす。

しかし太ももをもじもじ擦りあわせているところからしても、少女が何を求めているかは一目瞭然だ。

「ねえ、ちゃんと言葉にしてくれないと、わかんないこともあるよ。パティーちゃんは、今苦しいんだよね？ お股の辺りが疼いてしょうがないんじゃない？」

「そ、そんなこと」

そおかなあ、と腰に回した手を太ももに滑らせると、パーティーの肢体がびくとシユガーの腕の中で震える。

「言ったでしょう、溜め込みすぎちゃダメだつて。パーティーちゃんが今、欲しくて欲しくてしようがないもの、言ってみて。私なら、パーティーちゃんにそれをあげられると思うんだ」

「わ、私は………わたしは、しゅ、シユガーの……」

魔法少女のやり取りを、固唾を飲んで見守るファンクラブの面々。

「シユガーのおちんちん……おちんちん、欲しいのッッ」

一息に言ってしまうから、シユガーの肩口に顔を押しつけてくるパーティー。

「アソコが、おま〇こがじんじんして止まらないのおつ。魔獣のはいや、だけどシユガーの、シユガーのおちんちんなら、私……ッ」

「本当に、私のでいいの？ だつて、私は……んむうっ？」

そう、シユガーの正体は佐藤という名の中年のオッサン。

しかし青髪の魔法少女はシユガーに抱きついて自ら唇を重ねてくる。

「んっ、んう………れる、れるっ」

舌で唇を割ってねじ入れてくる積極性に、シユガーの方も思わずパーティーの背中に手を

回し、れろれろくちゅくちゅと舌を絡ませる。

媚薬のように甘い唾液を交換していると、むらむらとシュガーの目つきにエロスの光が宿る。

「うおおおおくくくつつつ、パティーちゃん、萌ええええええええええ！」

これはファンクラブの男の声ではない。

興奮に我を忘れたシュガーによる魂からの真実の叫び。

仁王立ちになるコスチュームの股間部分が「むくむくつ」と持ち上がり、下着を突き破らんばかりの勢いで、巨大な肉棒が頭をもたげる。

魔獣のケタ外れの巨根ほどではないが、標準サイズよりもはるかに巨大な肉棒を前に、パティーの目が丸くなる。

だがもちろん、一度火の点いた魔法少女の性欲は止まらない。

「シュ、シュガー、や、優しく……きやあんつ」

股間をギンギンに勃起させたまま、がばりとパティーを押し倒す。

いまだ魔法の副作用で身体の疼いているパティーでは、襲う気満々のシュガーに抵抗することすらできない。

あっけなく下着を剥ぎ取られ、開脚させられる。

「こつ、これがパティーちゃんの……うぶつ、は、はなぢが」

「いやあくつ、親父キャラに戻ってるわよシユガー！ あつ」

両肩をそつと押さえつけられたかと思つた瞬間、頬にちゅつとキスされる。

そのまま唇に、そして首筋に舌を這わされていくと、ぞくぞくと背筋が痺れる。だがそれは不快感ではない。

むしろ待ちわびていたものがようやく与えられた悦び。

「んっ、んふう……あふう……」

「ちゅつ、ちゅむ……私、もう我慢できない。入れるよ、入れちゃうよパーティーちゃん、いいよね？」

「あ、えつ、でも、あんなに人が見てるのに……あひやうつ」

ずいつと腰を割り込ませて突き出すと、処女花卉に固いものが当たる。

それはシユガーの、そして同時に佐藤の陰茎に他ならない。

思つた以上の固さと大きさに少しためらいを覚えるが、少女の肉唇はじつとりと蜜を垂らして茎の挿入を待っている。

（私、本当にシユガーとしちゃうんだ。おちんちん、入れられちゃうんだ。や、やつぱりちよつと怖いけど……初めては、シユガーがいいッ）

覚悟を決めてシユガーに抱きつくつと、この上なく優しい声で魔法少女が囁いた。

「パーティーちゃんのヴァージン、もらっちゃうね……ッ」

「ツツ……あああつ、んくううう……ツツ」

ずぶ……ずぶ……みしみしつ。

できるだけ痛みを与えないように。少しずつ腰を突き出し、少女の茎がパティーの花弁を押し開いていく。

とはいえ、処女未開地の窮屈さ、そして処女膜は無骨な侵入者を本能で拒む。それ以上進むには、強引に押し通るしかない。

「ごめんね、痛いよね？ もう少し……だから」

「うん、いい、いいよ……シユガーのおちんちんで、私の処女膜破って……！」

「パ、パティーちゃああんっ」

ずぬううっ。

一気に挿入が深まり、魔法少女茎は根本までねじ込まれる。

処女穴を拡張される衝撃、破瓜の痛み、たっぷりと肉が詰め込まれる圧迫感。

それらが一時に押し寄せてきて、痛みも快楽も混じりあつて何がなんだかわからない。わかっているのは、自分が今シユガーと繋がったということ。

「パティーちゃんの中、窮屈であつたかくて、気持ちいいツツ」

「わ、私もよくわからないけど、おちんちん熱いようッ」

二人の魔法少女はしっかりと抱きあつたまま、やがてゆるゆると腰を使いだす。

ストロークを短く、小刻みに振動させることで少しずつ膣穴をほぐし、乙女の処女肉に分泌された蜜を染み込ませる。

そのぬめりが行き渡ると腰使いは徐々に大胆になっていき、ずつ、ずつとリズムを取りながら処女穴の奥深くまで貫いていく。

先端がこつんと子宮口に当たり、シュガーは思わず唇を噛んで快感を堪える。

「シュ、シュガー」

「えへへ……パティーちゃんのおま〇こがあんまり気持ちよくて、入れたばかりなのにもうイキそうになっちゃった」

それでもピストンは決して止めず、衆人環視の中でシュガーはパティーの中心を執拗に掘り続ける。

ちゅくつ、じゅぶつと液質の音が漏れ始めるようになると、パティーも目元を赤く染め、魔法茎の抽送に身を任せてうっとりとする。

すでに破瓜の痛みはなく、その代わりにじんわりと身体の芯を溶かすような愉悅が魔法少女を満たしていく。

「私、も、もう平気だから……シュガーの好きなように動いて」

「う、うん。でも気持ちよすぎて、すぐに出しちゃうかもしれないけど」

くいくいと腰を振り立てるピンクの魔法少女に、青の魔法少女は穏やかな笑みで応える。

「いいよ、シュガーのだからいいの。全部出して……シュガーのおちんちんから、いっぱいいっぱい出して……ッ」

「パッ、パティーちゃん……ッッッ！」

少女の中で何かが弾け、相手を気遣いながらのピストンが暴走を始める。

「ひっ、ひあ、ああんっ。すごい、は、激しすぎ……あくううっ」

がっしゅがっしゅ、ずぶずぶっ、ぬぶぶぶぶっ。

肉汁の飛沫を上げ、剛直が少女の中心を激しく貫き、掻き回す。子宮を突き上げられる。パティーの身体が何度も大きく跳ね上がる。

それを力任せに押さえつけ、さらに激しくピストンを浴びせる。しかし処女穴のぬめりと締めつけに、さしもの魔法少女も耐えられない。

「んっひい！ 出るッ、出ちゃううううう！ パティーちゃんのおま〇こに、おちんちんミルクどびゅどびゅ出しちゃうよおおお……ッ」

びゅるっ、びゅくっ、どく、どくんっ。

ポンプのように勢いよく押し出された濃厚な白濁を子宮に注ぎ込みながら、それでもシュガーのピストンは止まらない。

「あああ熱いッ、熱いの入ってきてる！ お腹ぱんぱんになっちゃうううう」

大勢のギャラリィが息を呑んで見守る中で、シュガーは自分と同じ魔法少女に種付けを



した。

最後の一滴まで胎内に注ぎ込んで、どつとパティーの巨乳の上に倒れ込んだ。ひくひくと痙攣しているのは、パティーも同時にアクメに達したのだろう。

「うっわあ………なんかすごいことになっちゃったあ………」

聞きなれた声に顔を上げると、そこには獣耳のきわどいスーツの少女。

抱きあつて股間を繋げている魔法少女たちの姿に、呆気に取られている。

「アンジェ……あなた、今まで何してたの」

「い、いやあ〜っ。え〜っとおー。こ、これでも、急いで駆けつけてきたんですけどねえ

〜っ、ハハハハ」

明らかに嘘だ。

この騒ぎにすぐ気づいた人間の口の周りに、よだれの跡が残っているはずがない。

大方、今の今までいぎたなく惰眠を貪っていたのだろう。

「ちよ、アンジェ、あなたしかもお酒臭いわよ。昼間酒つてちよつとねえ」

「うう〜ん、しゅがあ〜。もつとお〜っ」

と、アクメから覚めたパティーがシュガーの首に腕を絡めて甘えてくる。

「ちよっっっ！ あたしが気絶してる間に、あなたたちはいったい、なんてことをお〜

っ！ アンジェッ、あんたの差し金？」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫とは異なる。美満の方に入ってください。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!

11年目も過ぎその家、お陰様その家まで!

3次元エロコミックマガジン

さらさらキアラ

守り聖女
アリスがセクシーに
加齢もつらくな

偶数月
17日発売

vol.61
2011 12 990円

3次元エロコミックマガジン

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!

魔法のヒサシ

大興奮! ヒサシの魔法

12月号

680円

奇数月
12日発売

モグダン

魔法のヒサシ

フェチをテーマにツキ抜ける作品群!!

Prism
コミックプリズム

18歳以上
420円

2・6・10月
下旬発売

Prism コミックプリズム

KTCといえば闘うヒロインアンソロ!

メガミクライシス Vol.3

闘争

雷の戦士
ライディ

対魔忍のサキ

ワルブルギスの淫夢

日常めると異域編を語る
美少女編 日になった

奇数月
中旬発売

メガミクライシス

詳しくはKTCの
公式サイトにて!

キルタイム

検索



書店、書籍通販サイトなどで好評発売中!
※いずれも18歳未満の方は購入できません。

コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト <http://ktcom.jp/>



title:

ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』

トキサナ

『DSの流儀』

chaccu

『生徒会長前哨戦?』

天道まさえ

title:

発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉



電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中! ※18歳未満の方は購入できません。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!